

8 今は幸せです

語り手：山本 孝子 / 聞き書き：資料収集調査員 湯山 英子



方正県残留婦人（昭和40年頃）／右端が孝子

山本孝子の略歴

- | | |
|----------------|--|
| 昭和2(1927)年10月 | 北海道美唄市 <small>びばい</small> に生まれる |
| 昭和4(1929)年 | 札幌市 <small>ちゅうおう</small> 中央区 <small>まるやま</small> 円山に引っ越す |
| 昭和15(1940)年6月 | 渡満、南靠山屯尋常小学校【用略集→】入学 |
| 昭和17(1942)年4月 | 3月に南 <small>みなみ</small> 靠山屯尋常小学校高等科を卒業し、同校の事務員として採用される |
| 昭和20(1945)年12月 | 収容所から中国人の家にさらわれる。韓福財 <small>かんふくざい</small> と結婚 |
| 昭和21(1946)年4月 | 両親と弟、妹がハルピンへ移動 |
| 昭和49(1974)年8月 | 日本に里帰り【用略集→】 |
| 昭和56(1981)年6月 | 日本に永住帰国【用略集→】 |
| 昭和63(1988)年10月 | 夫・韓福財が死亡 |
| 平成19(2007)年8月 | 中国へ墓参り |
| 現在 | 札幌市 <small>きつぽろ</small> に在住 |

はじめに

満洲での思い出は、南靠山屯尋常小学の事務員、続く臨時教員時代が山本孝子にとって僅か3年あまりの青春だった。収容所で中国人にさらわれ、両親と兄弟との別れ、さらわれた先で結婚し8人の子どもを産み、35年の歳月が経った。現在、日本に帰国して25年が過ぎ、80歳を超えた。「中国で40年、日本で40年になります」と語る、その年月の重さは計り知れない。

1. 渡満前

美唄、札幌、そして満洲へ

山本孝子は昭和2年（1927）年10月、現在の美唄市に生まれたが、2歳のときに父の商売が倒産して札幌市中央区円山に一家で引っ越した。当時の美唄は炭鉱町として栄えており、父は精米所やデンプン工場を経営、炭鉱の仕事にも手を出したが失敗したようだった。孝子には円山での記憶しかない。円山へ移った父はいろいろなことに手を出していたようで、ほとんど家にいなかったという。円山の小学校を卒業した昭和15（1940）年6月に渡満している。父がいつから満洲に行っていたかは分からないが、その年に家族を迎えに来て、母と孝子、4歳違いの妹、8歳違いの弟との5人が北海道を後にした。

兄弟は8人いたんだけど、上の姉さんたちはお嫁にいたりして、下の兄弟が妹と弟と私、両親と。父が満洲に行ったら、家ももらえるし、馬ももらえるし、畑ももらえる、土地ももらえるしとかなんとか。私も子どもだったからよくわからないけど。そういうことで迎えに来たからお母さんも行く気持ちになったのか、昭和15年の6月ころでしたね。ちょうど私が小学校を卒業してすぐでした。

新潟から船に乗り、^{ちょうせん}朝鮮から列車で^{ぼたんこう}牡丹江を経由して^{ジャムス}佳木斯まで行き、そこで一泊した。翌朝に^{さんこう}三江省^{いらん}依蘭県南靠山屯開拓団^{用馬車}まで馬車に乗り、一日がかりで着いた記憶がある。母が新潟からの船中、船酔いで動けなかったことを覚えていた。

2. 満洲での生活

高等一年に入学

札幌の円山小学校を6年で卒業し、同年6月に南靠山屯尋常小学校高等科に入学した。最初の家は、1軒を仕切って2家族が住み、そこに山本一家は入った。のちに別の場所に家を建てて引っ越している。両親は農業を始め、孝子も学校の夏休みには手伝った。すでに60歳近い父親は、中国人を雇い畑や水田を耕していた。北海道では商売をしていた両親がどのように畑仕事を覚えたのかは、子どもだった孝子にはよく分からない。

土地をおこして畑を広げて、ぜんぜん何も植えていなかった山の中だから、木を倒して根を掘ったりね、少しずつ広げていって。初めの年は水田が無かったけど、2年目に日本人だから水田を（はじめた）。どっかから水を上げて水田を作り出して、秋の稲刈りとか、草取りとか、私たちも夏休みに手伝いました。

家の近くに3軒くらい小さい家を建てた満人^{【用器集→】}がいて、家族で住んでいたみたい。仲良くして、旧の正月のときはあっちの人が呼びに来てくれて、うちの父親が行って食べたり飲んだりして、帰りに餃子をどんぶりに持って来てくれたり。日本のお正月には、あそこの3軒の家の人を呼んで、煮物菜なんか出したんだろうと思うけど。あんがい仲良くやってね。あの人達、出稼ぎしてたんか何なのか分からない。畑ね1町、2町あったかね。あっちの端に3軒建てて。1軒のうちは、おじいさんとおばあさんで。もう1軒のうちは兄弟たくさんいたけど、男の子みたいで、お嫁さんみたい人が2人ぐらいいて、あとお父さんとお母さんとか。もう1軒の家は行ったことあるけど分からないけど。

父親はお酒が好きでドブロクをつくりそれを毎日飲んでいたので、孝子の目には父親にとってはいい生活だったように映っている。孝子は小学校の高等科を昭和17（1942）年に卒業、同年4月から卒業校である南靠山屯尋常小学校の事務員として働き始めた。間もなく、教員が転勤になって佳木斯の学校組合からの補充教員が来るまで子どもたちに勉強を教えてほしいと頼まれて臨時の教員となった。

あの頃、子どもがたくさんいて、学校でも4教室しかなくて、1年、2年、3年、4年、5年、6年、高等1年、2年、全部で80人以上はいましたね。南靠山屯開拓団に学校は1つ。

立派なレンガの学校を建ててもらって、4教室に事務室があって、青年学校【用職集-1】ってあって、学校卒業した人が毎日じゃなくて1週間に1回か2回（来ていた）。教室が6つに真ん中に小さい当直室かなんかあって、ボーイさんって満人が水を汲んだり、住み込みの小さい部屋があって。夏には運動会したり、お盆には盆踊りして、樽をひっくり返して叩いて踊ったりして。お正月になったらあっちこっちの家に集まって百人一首をやったり。けっこう楽しかったですね。

この頃の話は目を輝かせて語る。「子守りみたい」だと思って先生を引き受け、3年生と4年生を担当した。運動会では遊戯を教えたり、職員として給料やボーナスをもらい、それを貯金していたという。子どもたちと一緒に過ごし、社会人として自分のために働いたほんのつかの間の幸せだった。

戦争時代でね、それに外国だから、給料よりも手当てが良かったの。戦時手当てとかね。何のあれにもならなかったけど。それが楽しかったから。生きがいのある生活したのそれぐらいだね。

あのころは配給でなんも売ってないので、貯金してね、戦争が終って品物出てきてから何でも買おうと思って、まず貯金だと思って貯金ばかりしてて。それが依蘭島の銀行だったもんで、逃げる時は山へ逃げたんで、通帳は何にもならなかった。うちの親もだいぶ貯めていた。通帳だけ持ってたけども、死ぬまで持ってたんだらうけど。結局、1銭もおりない通帳だった。

貯金したお金は、日本の敗戦によっておろすこと出来なくなってしまった。すでに物資は配給状態だったため、給料のほとんどを貯金していた。それから25年間、中国でお金の無い辛さを味わうことになる。それでも、この青春の3年間は夢を持っていた。

夢はあった。学校で学問がないという、学歴がないということで、先生たちはみんな上の学校の人ばかりで、会計とか庶務とか手伝っていたけど勉強して教員の免許でも取って先生になりたいなって夢はあったけど。戦争でなんにもなくなっちゃったけど。だからあの頃は、一番夢があって楽しかったっていうか。

教員の資格を取って先生になるというのが夢だった。涙ぐみながら「一番夢があった」頃を静かに振り返る。続く、残留婦人としての中国での生活は多くを語りたがらない。

3. 逃避行と残留

さらわれて

南靠山屯開拓団からの逃避行は8月14日から始まった。近くの港町、沙河子^{さがし}まで行き、ハルピンまでは船で向かおうとしたが、戻って来た船には先発隊がそのまま乗っていた。これでは駄目だということになり次は山へ向かった。日本敗戦の知らせは

沙河子の港で配られたビラで知ったという。

兵隊さんが来て。私たちが逃げようってことになって、兵隊さんについて山に入って。先頭が兵隊さんで後ろが兵隊さんで。だけでも雨降りでぬかるみでね。裸足なってね。足刺さって怪我したのも分らないくらい。早く行かないと追いつけないものだから。

自決する話も出たようだが、兵隊について山に逃げることにした。途中の河を渡る際に、自ら逃避行をあきらめて留まった人もいた。まだ南靠山屯開拓団の人たちは、1軒に1頭の割りで馬を引き連れて来たので、それが食料になったため「他の開拓団よりまだいい」状態だったらしい。

広い川があつて。その川渡るのに、兵隊さんたち縄かなんかを引いてくれて、縄につかまっ
て行けばいいんだけど流れがきついもんで、流されて行った人もいるみたい。行き先は松花
江^{しょうか}って大きな大きな川なんだけど。そこまで来て、団長のお婆ちゃんや年寄りの人たち「お
れたちもうついて行けないから」、男の人たちはお酒持っていて、「みんなでこれ酒飲んであ
れするわ」って。おばあちゃんは殺してくれって兵隊に殺してもらって、みんなが拜んでい
るところで。目では見てはいないけど鉄砲の音が聞こえて、埋めてもらったのかね。

あの頃、かわいそうだったけど、自分の命がわからないから、誰も「また捨ててあるな、ま
た捨ててあるな」ぐらいだったけど。みんな生きてね、目パチパチ生きて、歩く人を見てい
るの。子どもらはね。それだから、運のいい人は満人にでも拾われて行ったら、親は死んだ
ものと思ってもまだ生きているかもしれないしね。



逃避行の様子を綴った孝子の手書き原稿

20 日間ほどの逃避行が続いた。たどり着いたのは方正^{ほうまさ} 【用敵集→】の收容所 【用敵集→難民收容所】 だった。收容所では多くの人が死んでいった。死体を馬車に乗せ砲台山^{ほうだいさん}という山に捨てに行き、人を丸太棒のように運び、そこを「死人の山」だったと回想する。2007 年に中国へ行ったとき、この山に足を運び、拝んできたという。

收容所といっても1号から4号までの集合住宅になっており、山本家は4号に両親、孝子、妹と弟の家族5人が住んだ。4号は道路に面していたため、父は「ここにいたら危ない」と言って、家の外に穴を掘ってそこに住んだ。孝子は丸坊主になって戦闘帽をかぶり、井戸に水汲みなどに出かけたりしていた。その頃、女性はさらわれる人が多いため注意していたにも関わらず、孝子は中国人に連れさらわれてしまった。捕まったら困ると小さくなって井戸で水汲みをしていたのが、かえって女性だと分かってしまったようだ。昭和20（1945）年の冬、12月のことだった。

私は捕まったら困るからって小さくなっているから分ったみたいで。そして引っ張っていかれて、あちは鉄砲持っていたから保安隊【用器】って行って。誰も手を出す人いなくて、そのまま馬そりで。オーバーかシューバか何かをかぶされて、どこへ行くか知らないけど馬そりで連れて行かれて。

父親が探しまわって見つけ出したが、一時的に連れ帰ってもらったものの夫は手放す気はなく、どこで工面してきたのか孝子の父親に200円を渡した。孝子は夫に「ついて行かないから一目会わせてほしい」と懇願し、一時的に家族の下へ帰ることが出来たのだった。家族がハルピンに発つことになり、この200円を手切れ金のように渡したのだろう。このときの別れをかみ締めるように語った。

うん、そう、約束で。そこについて行ったら駄目だってあれで。私はついて行かないから一目会わせてくれて。だから行かなかったけどね。うん、いやー、なんていうのかね。でもまたいつか会えるのでないかという気持もあったし、これでお別れかなという気持もあったしね、悲しかったですね。やっぱり一緒について行きたかった。ああ、仕方がないも。どっちに行っても逃げる道もないし。お金もないし、食べるものもないし。親としては私が一番上だったから、力になったのかもしれないけどね。一緒に行けばね。

「いつかまた会える」「どっちにも逃げ道がない」という心境で、両親と弟、妹を見送った。まだその頃の夫を、「その満人、主人になった人」と呼ぶ。苦渋の思いで家族と別れたのだった。そのとき弟は11、2歳。父親は65歳、母親は56歳だった。

孝子には残る選択肢しかなかった。

近くの貧乏な農家には孝子のような日本人がたくさんいた。最初は逃げたら困ると自由に歩かせてはもらえなかったが、子どもが産まれてからは、そうした残留婦人たちとの行き来もできるようになった。開拓団のことやそれぞれ置かれた境遇のことを話すようになったという。だんだん言葉も覚え、子どもが学校に入る頃には中国語で手紙が書けるようになっていた。のちに農業形態が^{がっさくしゃ}合作社方式になり、小さい子はお年寄りに預けて、孝子も皆と同じように外に出て農作業をした。合作社でも部落によって貧富の差が大きく、孝子の部落は農業だけしかしない貧しいところだった。話の中で「貧しい」という言葉を何度も繰り返していた。

小さい子は年寄りの人に（あずけて）。8人も子どもいたんで。夜、電気ないから窓にランプ置いて縫い物、着るものっていうよりも接ぎばかりだね。膝かぶからここから子どもすぐボロボロになるんで。靴も作らないとならないしね。靴買うお金ないから、自分でみんな作るの。麻を買ってきて紐を作って靴の底になるんだけど、お天気のいいときはまだいいんだけど、雨が降ってきて濡れるとすぐ腐るっていうか、すぐ底がだめになっちゃうのね。

その頃になると8人の子どもを設けていた。靴を買うお金がないので自分で作り、集団での農作業の休憩時間に、その靴のほころびを縫う、破けては縫うことの繰り返しだった。冬服には古い綿をのばして中綿を入れ、それを縫い合わせるなどして子どもたちの服を作った。また、卵や野菜を4キロ離れた町まで売りに行っていた。

ニワトリ飼って卵集めて売りに行き、子どもに服一枚買ってやったり。畑の野菜ね、背中

にしょって町まで売りに行って、お塩にかえたり、石油にかえたり。うん。町まで4キロ。

行って帰ってきたら足が、ここが棒になったみたい。歩いて帰ってね、そうしたらお昼ご飯作らないと、みんな帰ってくるから。

普段の食事はトウモロコシのご飯、粟のご飯。そうしたご飯と汁物、漬物だけの食事だった。お正月だけは美味しいものが食べられた。夫の両親は孝子が来たときにはすでにいなく、夫の兄夫婦が近くに住んでいた。夫は日本の敗戦前、森林警察に勤めていたようだ。中国ではお金の無い家には嫁をもらえず、独り身で財産もない韓福財の嫁となった。

(夫は) やさしいけど、あんまり働くのは好きな人ではないね。家族がいるから養っていかなければならないという責任感のある人間ではなくて、若いときから末っ子だったかもしれないけど、その警察に行ってお金(給料で)、食べたり飲んだり遊んだりしていたんだろうから。農家で働くっていうのあんまり好きでないの、だから余計貧乏。

トウキビの粉とダンゴとトウキビのご飯ばかり。子ども多いから、食料が少ないときはジャガイモいっぱい入れて、汁入れてその上にトウキビの粉、ドロドロしてそういうの食べていたの。けどすぐお腹へるのね。それでも食べるもの足りないから。農作業は、トウキビに、アワにコウリヤン、大豆、そのうちに水田植えるようになってお米少しずつつくれるようになったけど。

そうした生活も、子どもが大きくなるにしたがい彼らも働くようになり、少しずつ

は楽になっていった。しかし、一番の助けとなったのは日本の兄や姉からの仕送りだったという。

4. 里帰りと永住帰国

手紙で知った両親の死

ほかの日本人から日本と手紙のやり取りが出来ると聞いて、孝子は本籍地である札幌市円山 1 丁目北大通り〇番地と記して区役所宛に手紙を書いた。本籍地を覚えていたのが幸いした。区役所で縁者を探してくれて、数年後に孝子の元へ返事が届いた。方正で別れた両親、弟と妹のハルピン以降の消息は分からないままだったが、日本に住む姉からの手紙で知ることとなった。ハルピンの収容所だった花園小学校で両親と妹は伝染病に罹って死んでしまったこと。弟だけが残ри、その後の行方が知れないとのこと。両親、妹や弟のことは、日本にいる兄があちこちに聞いて探したようだった。

こっちから帰国した人にうちの兄が聞いたみたいで、一番先にお母さん、体弱かったみたいで、それからお父さん、次に妹、弟が最後に残って、「みんなが見た、見た」って言うけど、どこにいるのか死んだのか生きているのか、いまさら音沙汰ないからきっと亡くなったんでないかと。誰かが「おまえ帰らないのか」って（弟に）言ったら、「1人になって、どうやって帰ればいいのか分らないんだ」って言って行ったという人がいるんだ。それから満人のところにもらわれて行ったのか、死んだのか分らない。

兄とも手紙のやり取りが続いた。兄は自分の退職金の中から 10 万円を中国にいる孝子に送ってくれた。その後も姉たちが仕送りをしてくれた。そのおかげで、家を建て、自分の息子に嫁をもらうことができた。そうした手紙のやり取りは続いたが、文化大革命 【用語集→】 のときにスパイという疑いでそれらの手紙は没収されてしまった。

中国から出して。はじめ音信不通だったけど、だんだん手紙出したり。あの頃の中国の紙がボロボロで、今うちの兄のところに行ったら、私から出した手紙をしまっているんですよ。それが、封筒が張りが悪いからボロボロになってやっと届いてね。それこそ昔のチリ紙みたいで。航空でなくて船で来たもんだから 1 カ月くらいかかったしょ。そのうちに揉まれてねボロボロになってくるのね。みんなに「中国の紙、こんなんだぞ」って、うん。本当にボロボロになっているの。

のちに日本に帰ってから兄の家で自分の手紙と対面した。また、孝子は近くの部落に住む残留日本人の代筆をしてあげていた。岩手、山形、長野、沖縄の人もいた。そうしているうちに、一時帰国 【用語集→】 することが出来るようになった。真っ先に帰ったのが兄や姉のいる札幌だった。同時期、長女が中国で残留孤児と結婚し岩手に住んだばかりのときだった。孝子は昭和 49 (1974) 年に一時帰国し、6 カ月滞在のところ心臓病が出てさらに 6 カ月延長することができた。そのため、後半は岩手の長女夫婦のところに行ったりすることができた。彼らも岩手の田舎から盛岡に移り、日本語の勉強をしたり、職業訓練校に通うなど自立の道を模索しているときだった。

札幌では兄や姉からミシンと自転車を買ってもらった。ミシンを手にしたことで、

子どもたちの服を夜なべで縫わなくてもよくなり、自転車は町に野菜を売りにいくときに使い、ずい分助かったようだった。また、もらったお金で二男と三男にお嫁さんを迎えることができた。少しずつ生活が楽になり、自分のことも考えるようになった頃だった。それから帰国まで6年を要することになる。

日本に里帰りしたときの様子を次のように語っている。いつか帰ることができると思っていた故郷では、夢心地だったという。

中国のああゆう野蛮な生活して来て、日本に来てね、札幌の町を歩いていたら、ふっと、自分でね、あれ、自分はこの世にいるのかあの世にいるのか分らなくてね。ほっぺたつねって、痛いから、あれ生きてるんだってね、そういう錯覚あったよね。極楽と地獄と。食べたいものは、白いご飯食べて、日本式のお汁や煮物を食べたら、やっぱり日本だなんて思っ

帰国への手続き

時期は定かではないが、周囲の残留孤児たちの帰国の手続きをするようになり、自分たちの帰国も現実的なものとなっていた。日本の戸籍謄本を送ってもらい、帰国の理由書を当時の厚生省【用紙集→】に送り、返事が来ると公安局【用紙集→】に持って行き、さらににほんちゆうちゆうごくりようじかん在日本駐中国領事館にそれを提出する。それらが通って公安局から帰国許可が届くことになっていたようだ。その許可が郵便で届くことになっていたため、「今日来るか、明日来るか」と郵便屋さんが来るのが待ち遠しかったという。日本での生活の不安は何もなく、日本へ帰ることを今か今かと心待ちにしていた。8人の子どものうち、中国で三女を病気で亡くしているため、昭和56(1981)年、日本に帰国したの

は次女、四男と五男、夫の5人。のちに五男は白血^{はっけつびょう}病のため札幌の病院で亡くなっている。続いて5年後くらいに長男夫婦、二男夫婦、三男夫婦を呼ぶことになる。8人のうち2人は中国と日本で死亡し、今、6人全員が日本で暮らす。

5. 日本で働く喜び

現金収入

日本での生活は、経済的自立から始まった。市議会議員の世話で靴修理の仕事が見つかった。最初は靴修理など見たこともなく、出来るかどうか不安だったが、実際に靴修理屋さんに2カ月間ほど通い、技術を習得することができた。开店資金は借りて生協に店を構えることができ、20年で返済している。「シューズクリニック山本」という店名だった。



靴修理店開店当時（昭和57年9月）

1日働いたら現金が入ってくるでしょう。嬉しかった。今日1万円働いたよ、日曜なんかは1万何千円働いてきたよ。現金を手にしたのは嬉しかったよ。毎月、毎月1万できたら1万、3万貯金できたら3万ね。だんだん貯まっていってまた嬉しくてね。いや、お金って有り難いなって思ったね。うん、本当に貧乏の生活してきたから。

現金収入が心から嬉しかったようだ。一緒に帰国した子どもたちは、午前中は日本語学校に通い、午後からそれぞれの学校に行くという生活が続いた。そのとき四男は14歳、日本語学校で勉強し、中学、高校へと進んだ。のちに日本語学校で知り合った同じ境遇の女性と21歳で結婚することになる。夫は、日本に来て7年目に病気で亡くなった。昭和63（1988）年、70歳だった。

日本に来て7年間。体の弱い人で、あっち痛いこっち痛いつて、病院もあっちこっち連れて歩いて、入院させたりしたけど、70歳でね（亡くなった）。10歳違い。だから、亡くなったら自分の家のお父さんやお母さんのお墓あるから、あっちの方（中国）に持って行って埋めてあげるかって言ったら、やだつて。やっぱり子供たちこっちにいるからお墓参りもしてもらえないし、やっぱり日本の生活に慣れたら日本の方が良かったんでない。そっちの3号棟の1階に住んでいたの。そこの管理事務所でお葬式して。幸せだったと思うわ。

夫の韓福財は、靴修理店を手伝っていた。言葉が分からないなりに、一生懸命お客と言葉を交わそうとするなど、店に出るのが楽しみだったようだ。

子どもがいたから父親としていなきゃなんない人だったんだろうね。たいした尊敬されるっ

て人ではないけどもね。でも一家族としていなければなんない存在だったんだらうね。(喧嘩は) あんまりしない。あっちがどなったら、私だまっているから。

中国と日本の生活がそれぞれ 40 年

最初に聞き取りをした平成 19 (2007) 年 9 月の時点で、南靠山屯開拓団で 5 年、方正で生活したのが 35 年で中国での生活が合計 40 年。日本を発ったのが 15 歳で、帰国して 25 年が経ち、ちょうど 40 年になったときだった。この節目の年に、娘と一緒に 25 年ぶりに中国を訪問した。



方正に墓参したときの孝子 (平成 19 年)

何 10 年ぶりで行ったら、昔の、道路はあるけど、建っていたところはみんなマンションになって、昔のお店は無くなっちゃって、ちょっと分らなかったけども。それから自分の住んでいた部落ね。昔は土の壁で草の屋根だったのが、今はコンクリートの家が変わってきれいになってびっくりしたね。

あの子達、方正で生れているから。昔、住んでだところ見て歩いて、お墓参りしたり、2 週間くらいいて。親戚多いから、ここの親戚、あそこの親戚とか歩いて。

方正でお墓参りをしてきている。南靠山屯開拓団で勤務していた小学校へは、「1人で行くには山の奥なので恐いし、1人で行く勇気がなくて」という理由で、訪問はしなかった。

北海道の滝川市には南靠山屯開拓団の慰霊碑（「殉難者之碑」）がある。孝子は8月の第一日曜日に行われる慰霊祭に毎年欠かさず参加している。



毎年、滝川市で行われる南靠山屯開拓団の慰霊祭

今、滝川に南靠山屯開拓団の慰霊碑があるんですよ。毎年、8月一番最初に日曜日に慰霊祭で、皆、遠くから集まって来て、東京からも2年に1回来たり。なつかしいですね。石碑は、町村さんのお父さんが知事の時建ったもので、南こくさんとん難民の墓で、亡くなった人の名前がみんな彫ってあるの。あのおばさんがいたね、あのおじさんもいたねとか。友達思い出したり。そこへ行ったら、慰霊祭に行ったら、慰霊祭が終ってお坊さんが来てお経をあげてくれ、滝川の役所の偉い人が来てくれて、その後会館で食事をするんだけど、昔の話をするんだけど。同級生も亡くなっていますよね。皆、滝川だからね。雨竜とか旭川とかに散らばっているけど、皆来るんです。

臨時で教えていたときの子どもたちも参加する。慰霊祭で「先生」って呼ばれるのがはずかしいという。資格がないことを負い目に感じているようだ。僅か3年間の青春時代が皆に会うことで甦ってくるのだろう。その当時の話をするとぱっと顔が輝く。

実は、最近まで勉強を続けていた。平成 19 (2007) 年まで夜間学校 (札幌遠友塾 自主夜間中学校) に通って勉強していた。70 代後半になっても向学心を忘れていない。

一昨年まで夜間学校にね3年間通って、そういうところに行ったら小学生になったみたいで、昔の字とか昔のことを思い出して楽しかった。あの3年間ね。市民会館のこっちの方の2階にあったの。本当の目的はね、町に行ってももう英語ばかり書いてあって、何が何だから分からないから、これ読めたらな、読めたらなって思って。あそこで英語教えていたから、目的は英語を覚えるあれだったんだけど。

帰国して42年。6人の子どもたちはそれぞれ自立し、子どもや孫たちがあちこちに連れて行ってくれることに幸福を感じている。安堵の言葉を何度も繰り返す。

でも帰って来れてよかった。あの当時は日本なんて二度と帰って来れるとは思わなかった。帰って来れて今、幸せ。したいことして。ゲートボールやって、パークゴルフやって、マージャンやって、舞踊やって。



聞き書きを終えて

中国帰国者自立研修センター【明陽寮→】（当時）の向後洋一郎氏こうごよういちろうに紹介をいただいて、山本孝子さんの作文を手にしたのが2007年の春頃だったと思います。6枚の原稿用紙には満洲へ行ったいきさつから、敗戦後の逃避行や収容所の様子までが綴られていました。大半は逃避行の途中で死んでいった人たちのことでした。

「40年過ごして来た中国。今日日本へ帰り、老後を幸せな楽しい生活を過ごして居ます。本当に何のための戦争だったのでしょうか。私達の歩いて来た人生、何か悪い夢を見た様です。でも、忘れてはいけません。二度と戦争はしたくありません」と力強く書かれていました。

いったいどんな人生が山本孝子さんにあったのでしょうか。インタビューは2回（2007年9月5日、2009年3月9日）。そのほかに原稿チェックと補足説明を郵便と電話にて行いました（2009年5月3日～8日）。

最初のインタビューは2007年の秋でした。とても前向きな人というのが初対面の印象です。しかし、聞き取りをするうちに重い話が続きました。とくに「さらわれた」ときの様子は、いったい何が起こったのか理解できず、もう一度聞くことを躊躇してしまいました。

2度目に伺ったのは、それから1年半後のことです。再度、さらわれたときの様子と夫への気持ちを投げかけてみました。淡々と語っていましたが、家族との別れについては、切ない声で、声を詰まらせながら話してくださいました。あのときの出来事を静かにかみ締めているようでした。

会うたびに救われたのは、「今、幸せです」という言葉でした。子どもたちが自立して家を建て、お孫さんが成長し、一緒に旅行したりしているようです。「今度、皆と沖縄に行くの」と声を弾ませていました。「あの子たちは私の苦勞を見てきているから」と孝子さんは、親思いの子どもたちのことをそう言います。家族の絆を強く感じました。

本文でも触れましたが、南靠山屯尋常小学校に勤めたときが青春時代と呼べるものだったようです。また、80歳を前にして数年前に通った夜間中学での勉強がことのほか面白かったこと。目を輝かせて話してくれました。勉強、したかったのですね。

山本孝子さんのお話をお聞きする前は、果たして山本さんの過去をちゃんと受け止めることが出来るか不安でしたが、前向きな様子を拝見するうちに、こちらが勇気づけられることが多かったように思います。お孫さんたちもきっとそういうおばあちゃんが好きなんだと感じました。多くを語ってくださった山本孝子さんにはたいへん感謝しています。ありがとうございました。

(ゆやま えいこ)

基本データ

聞き取り日時：2007年9月5日、2009年3月9日

聞き取り場所：山本孝子さんのご自宅

初稿執筆日：2009年5月6日

